



コロナ禍の危機の時代にこそ、
生命の源に遡る対話と、
魂をよみがえらせる歌を！

石牟礼道子・多田富雄
深き魂の交歓

言魂

— 詩・歌・舞 —

水俣のたどってきた五十年をまざまざと
思い出します。最初から、国家的欺瞞を
身をもって見破ったのは、おそらく水俣病
患者でありました。厚生省の組織が原因
や責任の所在を隠すように動く、たち
まち県の行政も市町村の末端組織、行政
協力員に至るまで、いつせいにこれにな
らつて動き、一部の医師たちでさえこれに
なりました。闇に葬られた患者たちがどれ
ほどいたことでしょうか。事件発覚より、
五十年の年月が経ちました。医学的に救
済された人はただの一人もおりません。

石牟礼道子 第十信より

私は曲がりなりにも科学、それも生物学
をやってきた人間です。水俣に象徴され
る生命環境の汚染は、生物全般の生存を
脅かすものであることに気づかぬわけは
ありません。しかも汚染は地球環境にと
どまらず、内部世界、つまり人間の魂を
犯し続けています。内部世界の汚染、危機
をどう告発するのも話題にしたい。本
当に救いはあるのでしょうか。今、生命と
魂のことを語れるのは、石牟礼さんくら
いだとさえ思うからです。そんな願いで
この往復書簡を始めることにします。

多田富雄 第一信より



また辛夷の花の
季節になりました。
多田富雄

出演者 坪井美香

笠井賢一

野村四郎

(声の出演)

桜間金記

なかええみ

能管・尺八 設楽瞬山

琵琶 岩佐鶴丈

歌板三味線
キーボード 佐藤岳晶

2021年

4月11日(日)

14時開演(30分前開場)

於 鍊仙会能楽研修所

入場料 4,000円

石牟礼道子と多田富雄の往復書簡『言魂』
(2008年藤原書店刊)は、多田富雄さんは

脳梗塞による半身麻痺に加え言語障害と嚥下障害を抱え、癌との戦いも始まっているなかで、石牟礼道子さんもパーキンソン病の症状が進行しているという状況で始められた。この二人の渾身の対話に感銘し、お二人の新作能の演出を手掛けていた私は、2008年の7月に「アトリエ花習」の旗上げの公演としてこの対話を軸に、お二人の詩や新作能の実演も挿入して上演した。

2010年4月11日多田富雄さんは、自ら立ち上げたINSLA(自然科学とリベラルアーツを統合する会)主催の第三回講演会「日本の農と食を考えるー農・能・脳から見たー」東京大学安田講堂での催し冒頭で壇上で開会の挨拶をされ、野村万作師による『三番叟』をご覧になり、その十日後の4月21日に亡くなられた。その後2011年3月11日に東北大津波により多くの人が亡くなり、福島原発は重大な原発事故をおこした。3月11日が誕生日の石牟礼さんは2018年2月10日九十歳で逝去。

多田富雄没後11年・石牟礼道子没後3年、二人の対話時にそれぞれに危惧していた生命環境の汚染はいよいよ深刻となり、環境破壊も一因である新型コロナウイルスのパンデミックの深刻な渦中にある。この度の上演により、お二人の深い危機感からの対話を、混迷を深める現代にいかにかに受け継ぐかを考えたい。

アトリエ花習 笠井賢一

往復書簡『言魂』より 詩・歌・舞

※多田富雄は笠井賢一、石牟礼道子は坪井美香が語る。◆印は挿入作品

◆プロローグ 石牟礼道子詩「花を奉る」
坪井美香 笠井賢一

◆多田富雄詩「歌占」

第二信 なふ、われは
生き人か、死に人かー石牟礼道子
坪井美香

◆多田富雄能「無明の井」より 謡
野村四郎
◆石牟礼道子詩「浜の甲羅」
坪井美香

第三信 老人が生き延びる覚悟ー多田富雄
笠井賢一

第四信 いまわのきわの祈り石牟礼道子
坪井美香
◆多田富雄詩「君は憤怒仏のように」
笠井賢一

第五信 ユタの目と第二の目ー多田富雄
笠井賢一
◆石牟礼道子「緑亜紀の蝶」より「空と海と」
歌と舞 坪井美香 なかえみ

第六信 いのちのあかりー石牟礼道子
坪井美香

第七信 自分を見つめる力・
能の歌と舞の表現ー多田富雄
笠井賢一
◆石牟礼道子能「不知火」より 謡・舞
桜間金記

第八信 花はいずこー石牟礼道子
坪井美香
◆石牟礼道子「六道御前」より浄瑠璃
歌・板三味線 佐藤岳晶

第九信 また来ん春ー多田富雄
笠井賢一

第十信 ゆたかな沈黙ー石牟礼道子
坪井美香

◆エピローグ 多田富雄詩「新しい赦しの国」
坪井美香 笠井賢一

多田富雄 1934年 茨城県結城市生まれ。東京大学名誉教授。世界的な免疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功労者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無明の井」をはじめ「望恨歌」「石仙人」など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。

2001年脳梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生、「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」「花供養」など新作能を書いた。リハビリ診療報酬改定の撤回を求める運動に取り組み、著書に全詩集「寛容」「免疫の意味論」「脳の中の能舞台」「残夢整理」など多数。自然科学と人文学の統合を体現した「万能人」であった。パンデミックについてINSLAでも取り上げたことがあり、存命であれば如何なる発言をされるかも考えさせられる。

石牟礼道子 1927年 熊本県天草郡に生まれ。詩人・作家。「苦界浄土ーわが水俣病」は文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として完成させた。マガサイサイ賞、紫式部文学賞朝日賞、芸術選奨文科学大臣賞受賞。著書に「はにかみの国 石牟礼道子全詩集」「石牟礼道子全集「不知火」を藤原書店より刊行。

作家としてのすべてが凝縮された新作能「不知火」は東京、熊本、2004年には水俣で奉納上演された。多田富雄は新作能の類型を破る画期的な作品と評価した。現代の病巣を癒す力と、深い祈りと歌に溢れた作品群は日本文学の枠を超えた重要な文学となっており、コロナ禍の今日ますます示唆に富んでいる。

2021年
4月11日(日)

14時開演(45分前開場)

於 鍊仙会能楽研修所

東京都港区南青山4-21-29

TEL0334012285

〈交通〉表参道駅A4出口徒歩3分

入場料 4000円(全自由席)

問合せ・申込 アトリエ花習

TEL090-9676-3798
FAX044-989-0133
後援 藤原書店

